

御所市文化財調査報告書 第 7 集

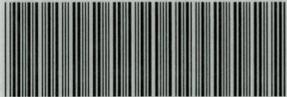
奈良県御所市

くじら  
櫛羅ナムギ遺跡



奈良女子大学蔵書

平成元年 3 月



SS0002691000

御所市教育委員会

210.2

91

## 序 文

御所市は、市街の中心部を少し離れると豊かな田畑が広がる田園都市であります。しかしながら、近年の大都市開発の波は、周辺部にもおよび、本市にあっても住宅等の開発が増加しつつあります。

ここに報告する調査は、個人の農業倉庫建築に伴うものであり、このような緊急の発掘調査としては、本市では初めて国庫及び県費の補助を受けて行ったものであります。調査地近辺は、今まで発掘が行われておらず、全く未知の状態でありましたが、今回の調査で、遺構及び遺物包含層が確認されました。本書が今後の調査・研究の一助となれば幸いです。

末筆ながら、調査にあたり、土地所有者である吉岡次郎氏に御理解、御協力をいただきました。また現地では作業員の皆さん、学生諸氏に御協力をいただきました。記して感謝の意を表すものであります。

御所市教育委員会  
教育長 谷村 忠敬

## 例 言

- 1、本書は、昭和63年度市内所在遺跡緊急発掘調査として、国庫・県費の補助を受けて御所市教育委員会が実施した御所市櫛羅に所在する櫛羅ナムギ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、本遺跡は、昭和47年発行、奈良県遺跡分布地図第3分冊の16-B-39に該当する。
- 3、現地調査には、御所市教育委員会・木許守が、同会・藤田和尊らの協力を得てあたった。
- 4、調査期間は、昭和63年11月21日～12月10日（実労13日）である。
- 5、現地調査には、生野英夫、岡本義伸、奥本一雄、角南義則、柴田康幸、森田利昌、平尾今日子、巽基安氏の参加、協力を得た。
- 6、遺物整理および本書作成にあたっては、藤村藤子、尾上昌子氏の協力を得たほか、藤田の協力があつた。
- 7、本書の執筆・編集は木許があつた。また製図は、木許のほか藤村がこれにあつた。
- 8、調査に際しては土地所有者・吉岡次郎氏のご理解、ご協力を頂いた。記して感謝したい。

## 本文目次

序文 御所市教育委員会教育長 谷村忠敬

例言

1	位置と環境	1
2	調査の契機と経過	3
3	調査の成果	4
①	基本土層	4
②	遺構	6
③	出土遺物	7
4	まとめ	11
	遺物観察表	12

## 1 位置と環境

御所市は、奈良盆地の西南部に位置する。西は葛城山・金剛山によって、大阪府との境をなし、東南部は竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵などが起伏し、北部は低平な奈良盆地の一部を占めている。

調査地は葛城山東麓に位置しており、葛城山から東流して葛城川に注ぐ小河川に挟まれた、標高約142mを測る緩やかな尾根上に立地する。

さて、調査地周辺の歴史的環境であるが、御所市における縄文時代の遺跡は、櫛羅遺跡(1)、玉手遺跡のほか、後期初頭の小林遺跡(2)がある。小林遺跡は、当調査地と同じく葛城山東麓にあって、石器の二次的加工を行う製作場と考えられた。

弥生時代には、拠点的大集落である鴨都波遺跡(3)があり、玉手遺跡、今住遺跡、古瀬遺跡、名柄遺跡が知られ、小林遺跡では中期中葉の方形周溝墓が検出されている。また、高地性集落では、吐田平遺跡(4)、葛城山山頂遺跡、国見山遺跡、本馬丘遺跡などが知られていたが、本年度の巨勢山古墳群の調査において、後期中葉から後葉にまで下る巨勢山中谷遺跡の存在を確認した。遺構は、竪穴にピットを配するものが4基検出され、これは、住居跡としては規模が小さく、主柱穴もなかったことから、小屋遺構と考えた。遺構にはほかにテラス状遺構と土坑5基がある。遺物のなかにはサヌカイト製の石鏃、剥片、碎片および未製品を含んでおり、このことは、本遺跡が石器製作に関わることを示唆するものである。

市内における古墳時代前期の遺跡は、その絶対数が少なく検出例も多くないが、楢原遺跡(5)の調査では畿内第V様式、庄内式土器、布留式土器が出土している。一方、古墳については、前期に該当するものがなく、5世紀の前葉に至って突如として、全長238mを測る大形前方後円墳である室・宮山古墳が築造される。本墳は後円部主体部の竪穴式石室に長持形石棺を有し、主体部の周囲には形象埴輪を配するものである。副葬品として、鏡片・武具・武器類・石製品等が出土している。また、本墳の陪冢的位置を占める室・ネコ塚古墳は、主体部に竪穴式石室を有していたと考えられ、表面採集資料に甲冑・刀剣類・鉄鏃の破片がある。当地における首長墓の系譜は、その後、掖上鐘子塚古墳→新庄屋敷山古墳→飯豊陵古墳→二塚古墳の系譜がたどれる。そして、これらの古墳の築造を契機として、群集墳が造営されるのである。宮山古墳の背後には、総数800基に達するかと考えられる巨勢山古墳群が存在し、5世紀前葉から7世紀中葉に至るまで古墳が築造されている。葛城山東麓では、寺口和田古墳群・寺口千塚古墳群・火野谷山古墳群・寺口忍海古墳群(6)・山口千塚古墳群(7)・笛吹古墳群(8)・小林別家古墳群(9)・石川古墳群(10)などが造営される。これらの群集墳のうち、調査区に近いところで、小林別家古墳群では、3基の横穴式石室を主体部とする円墳のほか1基の古墳が確認されており、小林遺跡榎ノ木地区では3基の横穴式石室墳があって、銀製釵子が検出された。ま

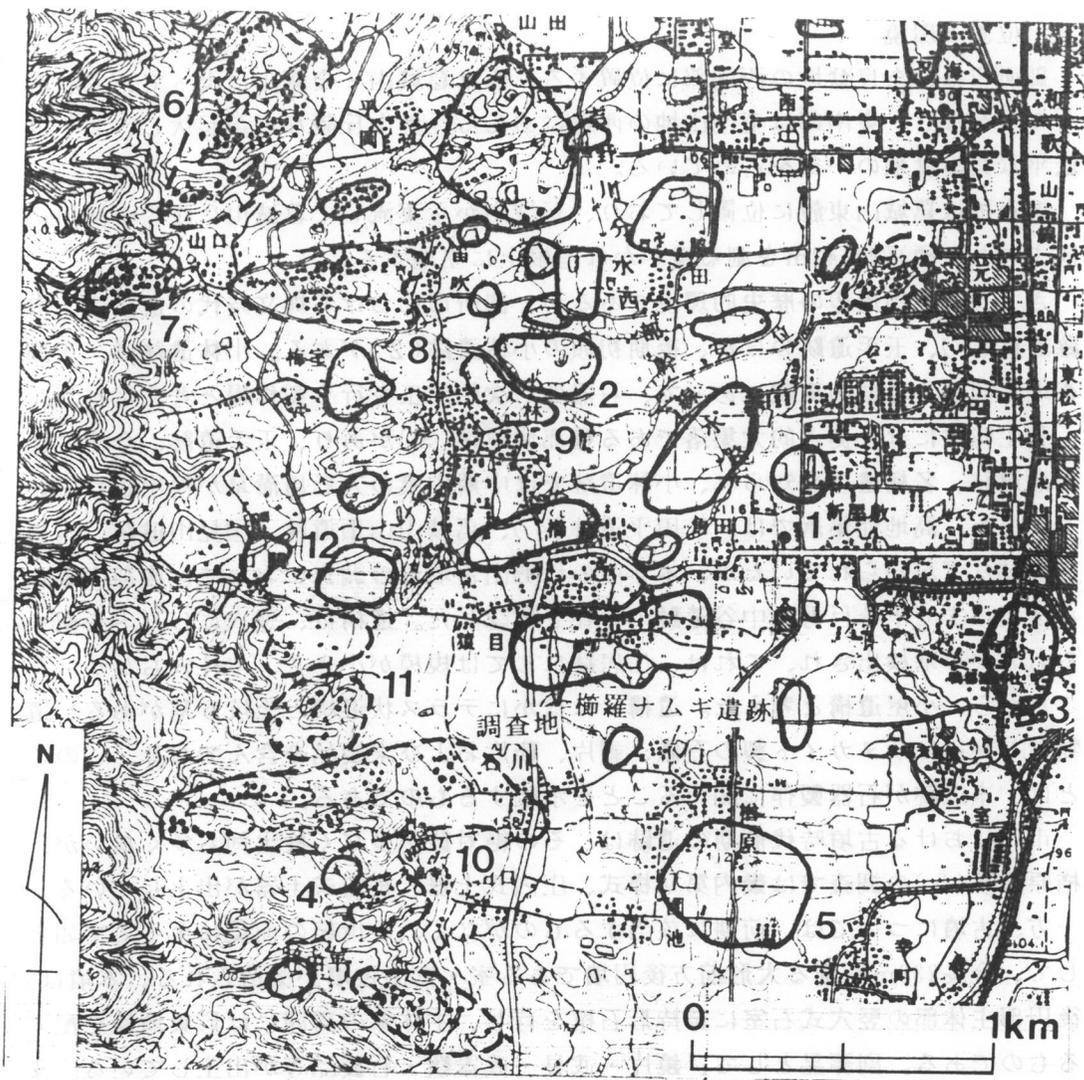


図1 榊羅ナムギ遺跡周辺遺跡分布図

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1 榊羅遺跡    | 7 山口千塚古墳群    |
| 2 小林遺跡    | 8 笛吹古墳群      |
| 3 鴨都波遺跡   | 9 小林別家古墳群    |
| 4 吐田平遺跡   | 10 石川古墳群     |
| 5 橋原遺跡    | 11 大正池南1・2号墳 |
| 6 寺口忍海古墳群 | 12 榊羅城跡      |

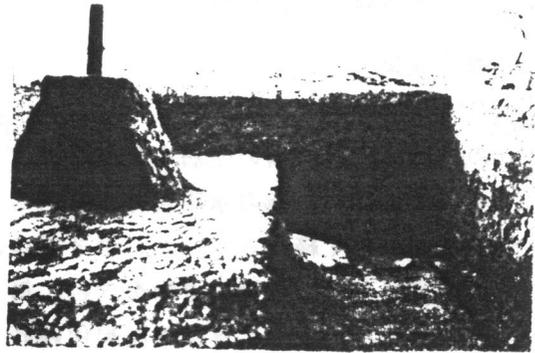
た、調査地の約900m西方にある大正池南1・2号墳が調査されている。1号墳は小形の横穴式石室を内部主体とし、2号墳は組合せ式箱形石棺を主体部とする。

当地の奈良時代以降の遺跡は、詳細が不明であるが、室町時代とされる榊羅城跡が調査地より西方約700mの地点に存在している。後述のように今回の調査では中世の遺物包含層を確認しており、今後の当該期の資料の蓄積が待たれよう。

## 2 調査の契機と経過

御所市榑羅2411番地の吉岡次郎氏より、同榑羅1842番地2所在の農地について農地転用申請が提出された。当該地は、奈良県遺跡分布地図16-B-39として登録されている。開発予定が農業倉庫建築であったため、市内所在遺跡緊急発掘調査として、国庫・県費補助を受けて、事前調査を行うこととしたものである。

発掘調査は、昭和63年11月21日、東西8m、南北9mの調査区を設定したあと、南端に幅50cmのトレンチを掘削することから開始した。断面で溝状の遺構が確認できたので、この面での遺構検出に努め、11月28日までに、遺構の埋土の掘削、写真撮影を完了した。その後、南端トレンチをさらに深く掘り下げ、現地表から1.7mで地山面を検出した。この間に包含層を計5層確認し、1層ずつ面的に掘り下げ、各面の上面で精査したが、遺構が存在する徴候すら得られなかった。12月3日、第7層上面で精査を終えたが、これ以上、全面を地山面まで掘り下げることは、調査面積が狭いため危険であり、また、建築予定が現地表に盛土をして深さ20cmを掘削するだけのもので、遺構面を破壊することがありえないと判断されたことから、第4層以下はトレンチの幅を2mに広げ、この範囲で調査を継続することにした。12月6日、地山面下、現地表から2mの深さまでのトレンチの掘り下げを完了した。なお、この間に2層の包含層を確認しているが、遺構は見い出されなかった。12月7日、4面の断面実測及び周辺地形の測量を終え、12月8日～10日埋め戻し作業を行い、10日、土地所有者に、倉庫建築後現状変更が生じた場合には改めて発掘届けを提出するよう指導して、現地での調査をすべて終了した。



南端トレンチ（西から）

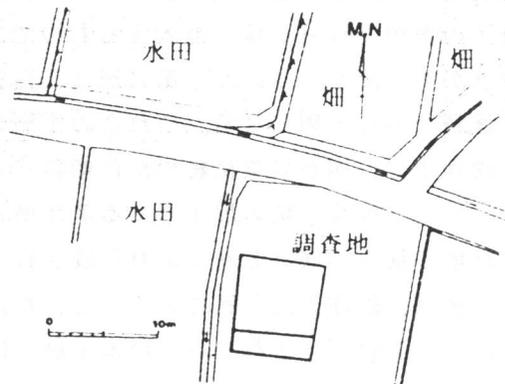


図2 調査地位置と周辺地形

## 調査日誌抄

- |        |                                      |        |                              |
|--------|--------------------------------------|--------|------------------------------|
| 11月21日 | 調査開始。調査区設定。南<br>トレンチ掘削開始。ベルコ<br>ン搬入。 | 12月3日  | 包含層Ⅳ上面精査。トレン<br>チ拡張後掘り下げる。   |
| 11月25日 | 素掘り溝面検出。埋土掘り<br>始める。                 | 12月6日  | 地山面下までトレンチ完掘。                |
| 11月26日 | 雨天現場中止。                              | 12月7日  | 断面実測。地形測量。写真<br>撮影。          |
| 11月28日 | 素掘り溝写真撮影完了。                          | 12月8日  | 埋め戻し開始。パイプロブ<br>レート搬入。       |
| 11月30日 | 包含層Ⅱ上面精査後除去<br>開始。                   | 12月10日 | 埋め戻し完了し、器材を撤<br>収して、調査を終了する。 |
| 12月2日  | 包含層Ⅲ上面精査。                            |        |                              |

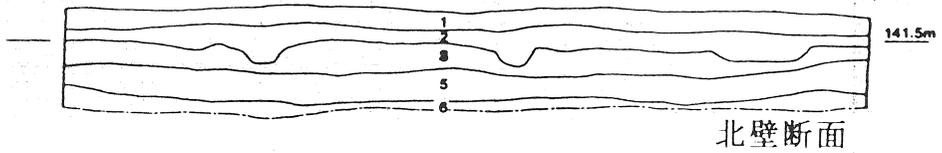
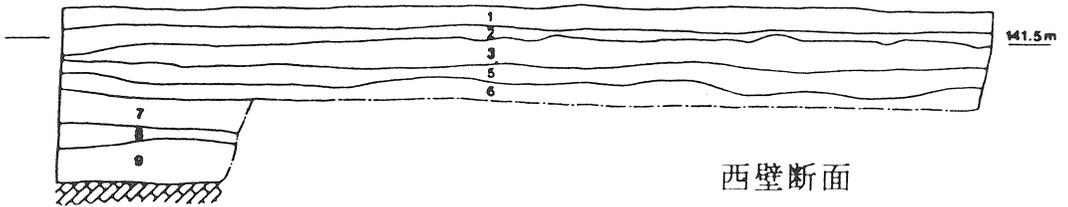
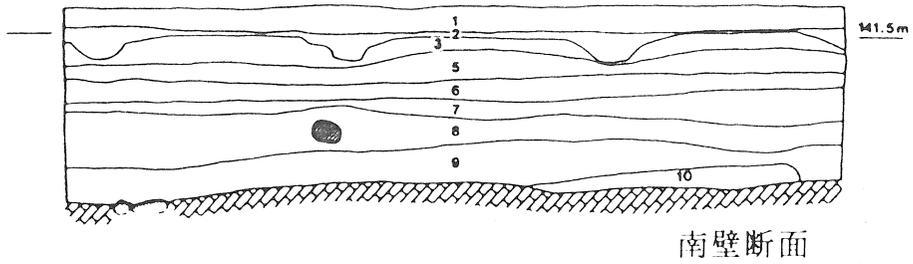
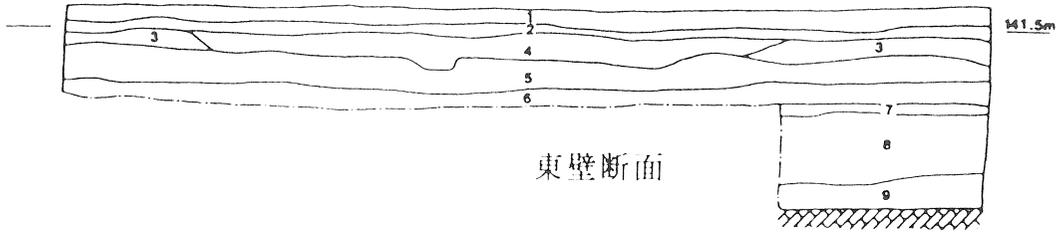
### 3 調査の成果

#### ① 基本土層

今回の調査で、計10層の土層を確認した。

第1層は、層厚約25cmの水田耕作土である。第2層は、明黄褐色礫砂土で、掘削が困難なほどかたく締まっていた。第3層は、暗灰色粘質土で、層厚15～30cmである。古墳時代から中・近世の遺物を含む。第4層は、第3層上面で検出した攪乱土坑の埋土である。色調・土質は暗灰褐色礫砂土である。第5層は、暗灰褐色粘質土で層厚は約20～25cmを測る。古墳時代から中世期の遺物を含む。第6層は、暗灰褐色砂礫土で層厚は約20cmである。古墳時代から中世期の遺物を含む。第7層は、赤褐色砂礫土で層厚は約10～40cmである。古墳時代を中心とする時期の遺物が、上部により多く認められた。第8層は、暗灰色砂礫土で層厚は20～50cmである。古墳時代の遺物を含む。第9層は黒灰色粘質土で、層厚約30～40cmである。この層は黒色の粘質土の塊がブロック状に混入するもので、確認した南壁断面の西半では灰色褐色礫砂土が多く混じっていた。第10層は、白灰色礫砂土で、土質が地山に近くブロック状の堆積であると思われる。これらの土層の下に地山が見られた。地山は、花崗岩質の礫砂土で、西から東に緩やかに傾斜している。

このように、攪乱土坑の埋土である第4層とブロック状の堆積である第10層を除くと調査地の基本土層は8層により形成されていることが確認できた。これらのうち、第2層は、耕作土直下層であること、かたく締まっていること、第3層以下には少なからず遺物が含まれていたが本土層にはそれが全く認められなかったことから、この層は整地層であると考えられる。また、遺物包含層は第3層から第8層まで、第4層を除いて、5層を確認した。以下、遺物包含層は上から包含層Ⅰ～Ⅴと称する。



- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 耕作土           | 6 暗灰褐色砂礫土(包含層Ⅲ) |
| 2 明黃褐色礫砂土(整地層)  | 7 赤褐色砂礫土(包含層Ⅳ)  |
| 3 暗灰色粘質土(包含層Ⅰ)  | 8 暗灰色砂礫土(包含層Ⅴ)  |
| 4 暗褐色礫砂土        | 9 黑灰色粘質土        |
| 5 暗灰褐色粘質土(包含層Ⅱ) | 10 白灰色礫砂土       |



图3 土层断面图

## ② 遺構

第3層上面で、南北方向に平行に走る素掘り溝4条を検出した。西端のものは、多くは調査区外に出るため、東側の落ち肩のみが検出された。また調査区の東端のものは一部攪乱をうけていた。溝の幅は0.4~1mで、深さ15~20cmを測る。溝間の距離は概ね2.3mで等間隔である。

溝の埋土は、総てかたく締まった第2層であった。第2層は、前節で述べたように整地層と考えられる。このことから、この溝の機能は、整地と同時に放棄され、上層の水田面が形成されたものと考えられる。また、東端で、平面で最大5.5m、深さ約25cmの攪乱土坑を検出したが、大部分は調査区外にあると思われ、その性格を明らかにすることはできない。ただ、整地の直前まで素掘り溝が存続していたことを考えあわせると、この土坑が、整地時より大きく時間差を隔てた以前から存在していたとは考え難い。また土坑の埋土は、色調で第2層が明黄褐色であったのに対して、暗褐色であったが、土質はいずれも砂礫土であった。これらのことから、この土坑は、第2層の整地時に形成されたものと考えられよう。

さて、素掘り溝の成立年代であるが、埋土から遺物が出土しなかったために、決定は困難である。しかし、これらの遺構は、第3層、つまり包含層Ⅰを掘り込んで造られている。包含層Ⅰの出土遺物については次節で述べるが、新しいものでは近世の土器を含んでいる。よって、これらの遺構の年代は近世以降ということが出来るだろう。

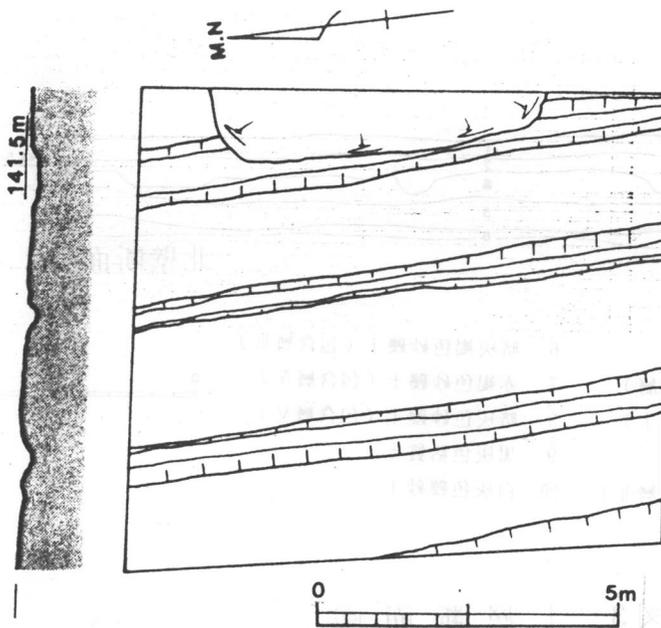


図4 遺構平面図

### ③ 出土遺物

遺物は、いずれも包含層出土のもので遺構に伴うものは無かった。出土量は、コンテナに3箱程あったが、多くは細片となっており、図化し得たものは48個体である。

包含層Ⅰでは特に細片化が著しく、図化できたのは4個体のみであった。1は、中世の羽釜である。3・4は、須恵器甕の破片である。外面は平行タタキが施され、内面は同心円文の上から粗いヨコナデ調整が加えられている。これらは、古墳時代の遺物である。包含層Ⅲにはほかに近世の遺物も混入していた。

包含層Ⅱも古墳時代から中世の遺物が認められる。9～11は、須恵器甕の体部である。外面に平行タタキを施し、内面に同心円文が残る。11は内面にヨコナデを加えており、9は外面にカキ目調整を、10は外面にヨコナデを加えた後にカキ目調整を施すものである。概ね古墳時代後期におさまるものと考えられる。5は、いわゆる「て」字状口縁を呈する土師器小皿である。このような形態の小皿はほかに包含層Ⅲの12～14がある。11世紀後半から12世紀前葉頃のものであろう。6は土師器小皿である。7は青磁碗である。器表の傷みが激しいが、蓮弁文を浅く描き、施釉している。8は、瓦器播鉢である。口径・器高など復元できないが、底部は平底で、内外面ナデ調整を行い、内面は単位10本以上の播目を放射状に施す。15世紀代のものと考えられる。

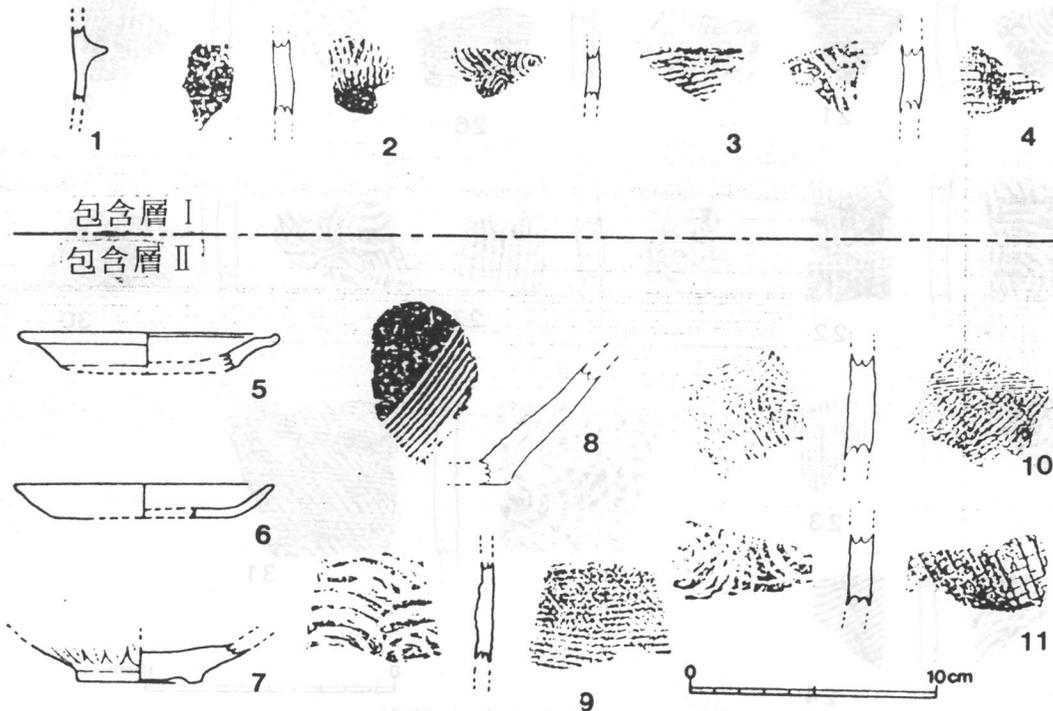


図5 包含層Ⅰ・Ⅱ出土遺物

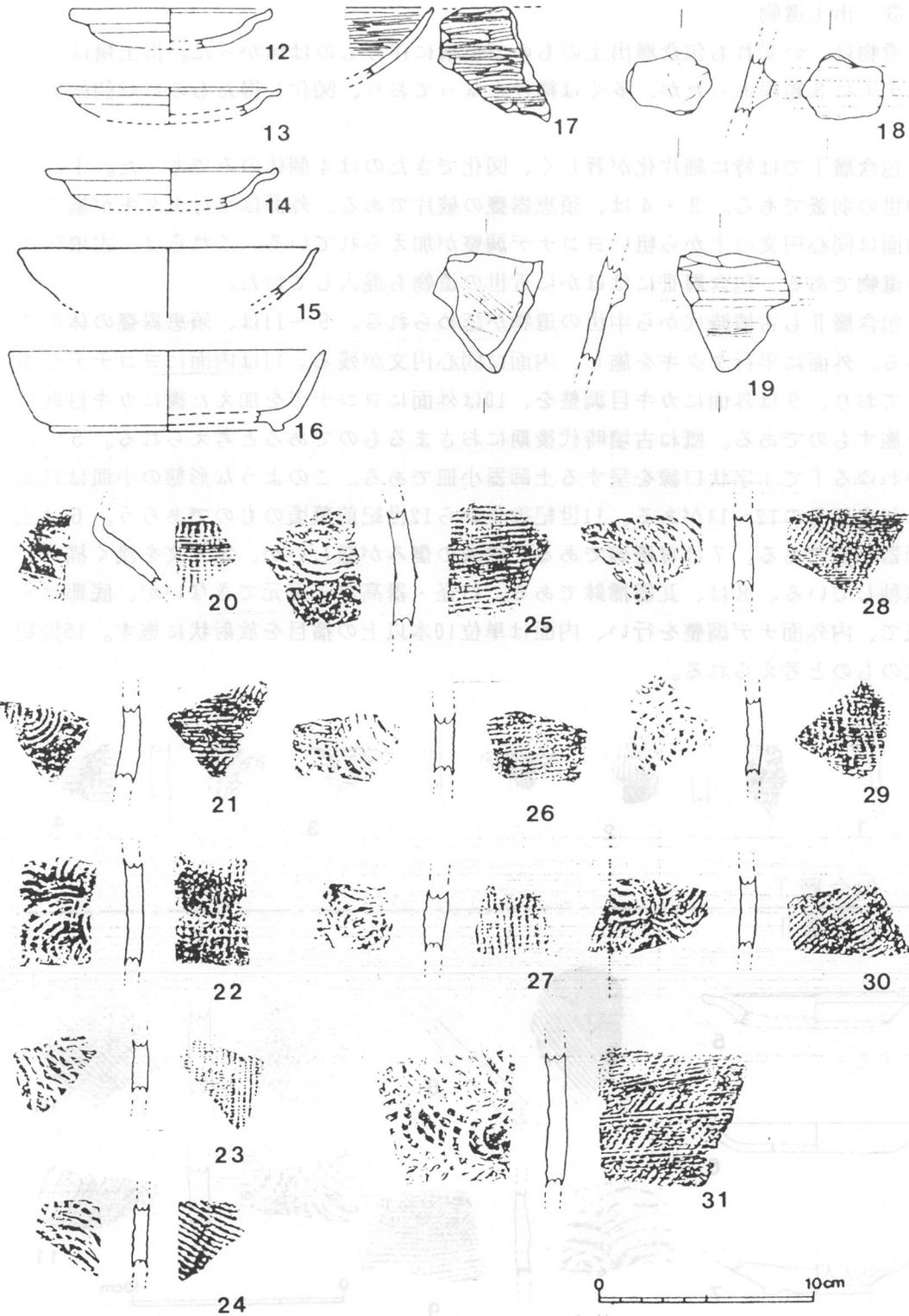


図6 包含層Ⅲ出土遺物

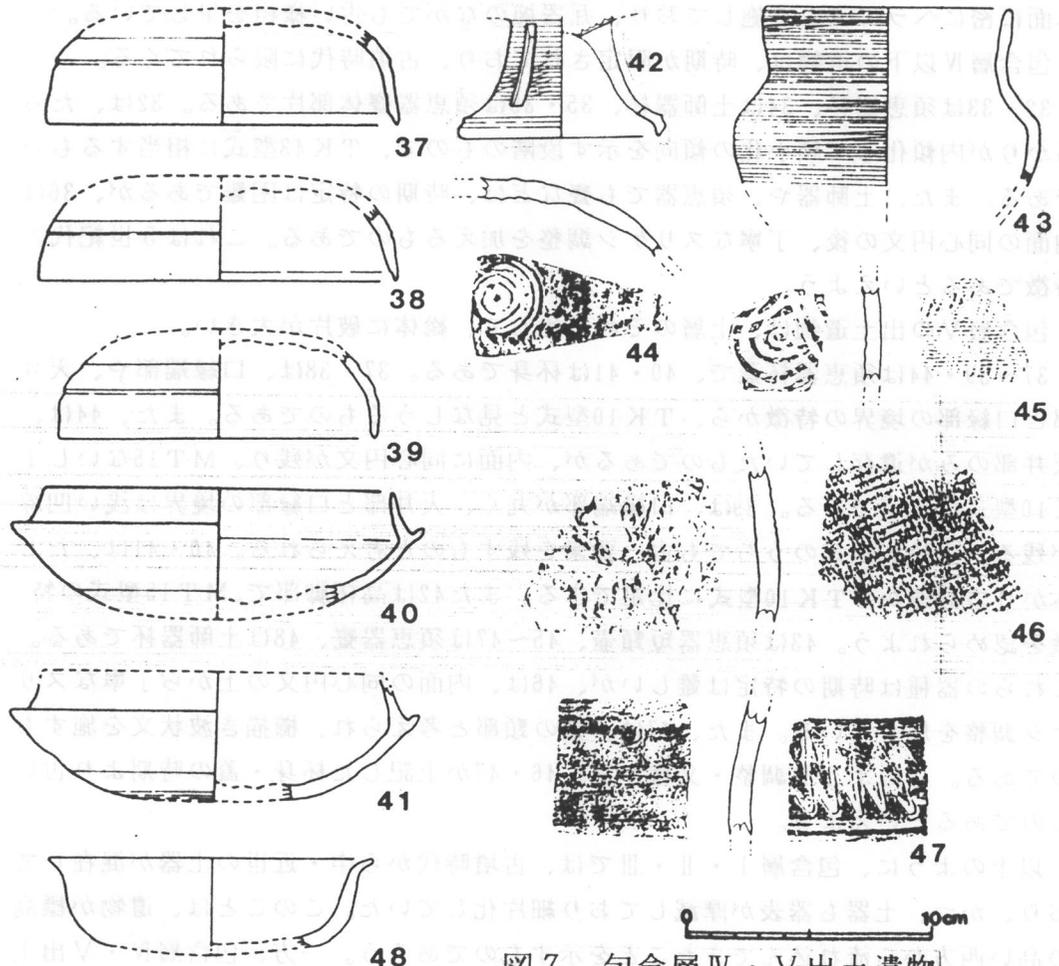
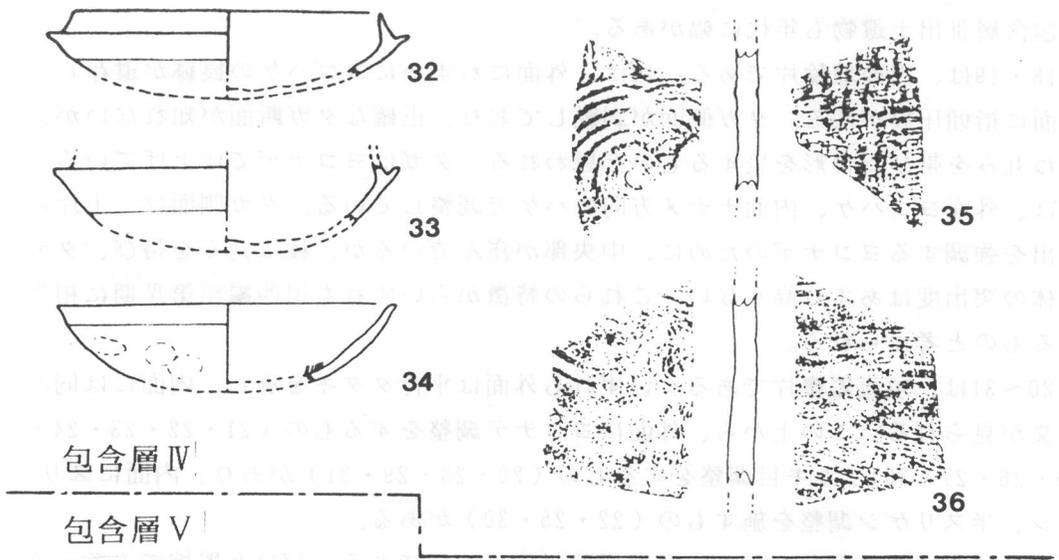


图7 包含層Ⅳ·Ⅴ出土遺物

包含層Ⅲ出土遺物も年代に幅がある。

18・19は、円筒埴輪片である。18は、外面にわずかにヨコハケの痕跡が遺存し、内面に指頭圧痕が残る。タガ側面が剥脱しており、正確なタガ断面が知れないが、概ね丸みを帯びた台形を呈するものと思われる。タガはヨコナデで仕上げている。19は、外面ヨコハケ、内面ナナメ方向のハケで調整している。タガ側面は、上片の突出を強調するヨコナデのために、中央部が窪んでいるが、稜は丸みを帯び、タガ全体の突出度はあまり高くない。これらの特徴からいずれも川西編年第Ⅳ期に相当するものと考えられる。

20～31は、須恵器甕片である。いずれも外面は平行タタキを施し、内面には同心円文が見られる。この上から、外面にヨコナデ調整をするもの(21・22・23・24・25・26・27・30)、カキ目調整をするもの(20・28・29・31)があり、内面にスリケシ、半スリケシ調整を施すもの(22・25・30)がある。

16は須恵器杯で高台が付く。8世紀前半代のものである。17は瓦器碗である。内外面に密にヘラミガキを施しており、瓦器碗のなかでも古い様相を呈している。

包含層Ⅳ以下の遺物は、時期が限定されており、古墳時代に限られてくる。

32・33は須恵器杯、34は土師器杯、35・36は須恵器甕体部片である。32は、たちあがり内傾化して矮小化の傾向を示す段階のもので、TK43型式<sup>(2)</sup>に相当するものである。また、土師器や、須恵器でも甕などは、時期の特定は困難であるが、36は、内面の同心円文の後、丁寧なスリケシ調整を加えるものである。これは5世紀代の特徴であるといえよう。

包含層Ⅴの出土遺物は、上層のそれに比して、総体に破片が大きい。

37～39・44は須恵器杯蓋で、40・41は杯身である。37・38は、口縁端部や、天井部と口縁部の境界の特徴から、TK10型式と見なしうるものである。また、44は、天井部のみが遺存していたものであるが、内面に同心円文が残りに、MT15ないしTK10型式に比定できる。39は、口縁端部が丸く、天井部と口縁部の境界は浅い凹線が残る。TK43型式のうちでも古い要素を残すものと考えられる。40・41は、たちあがりの形態からTK10型式に比定できる。また42は高杯脚部で、MT15型式の特徴を認められよう。43は須恵器短頸壺、45～47は須恵器甕、48は土師器杯である。これらの器種は時期の特定は難しいが、46は、内面の同心円文の上から丁寧なスリケシ調整を施している。また、47は、甕の頸部と考えられ、櫛描き波状文を施すものである。このような調整・文様から、46・47が上記した杯身・蓋の時期より古いものであるといえよう。

以上のように、包含層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、古墳時代から中・近世の土器が混在しており、かつ、土器も器表が摩滅しており細片化していた。このことは、遺物が標高の高い西方から流れ込んできたことを示すものであろう。一方、包含層Ⅳ・Ⅴ出土

遺物の時期は、ほぼ古墳時代に限られている。特に包含層Ⅴ出土の土器は、破片が比較的大きく、5世紀後葉とも思われるものを含むが、TK10型式期を前後する時期のもの比率が高くなっている。これは、土器自体が大きくは移動していないことを示すのであり、調査地近辺に古墳時代後期の遺構が存在することを示唆するものであろう。

#### 4 まとめ

今回の調査で、遺構としては、素掘り溝4条を検出した。このような素掘り溝は耕作に関係する遺構として、これらの溝から、溝形成期の条里地割の復元や、あるいはその初源を究明する手懸かりになるものと考えられている<sup>(3)</sup>。検出した遺構は、ほぼ南北方向に掘られていた。その形成時期は、包含層Ⅰ上面で検出したことから近世以降であると考えられた。この溝が耕作に関係するとすれば、溝の方向が畦畔の方向を反映している可能性が高く、調査地周辺のこの時期の条里地割を考える参考資料となるものであろう。

遺物は、すべて包含層から出土したものである。上層の遺物は、古墳時代から中近世のものが混在していたが、破片数は中世のもの比率が高かった。また特筆すべきこととして、包含層Ⅲの遺物中に埴輪片が含まれていた。これらの遺物はいずれもローリングをうけていたことから、調査地西方の葛城山よりに中世期の遺跡及び古墳が存在することを示唆するものである。また、包含層Ⅴの遺物は概ねTK10型式期に限定されており、破片も比較的大きかった。このことから、近辺に6世紀中ごろの遺構が存在すると推定できたのである。

今回の調査は、本遺跡で最初のものであった。これまで本遺跡は遺物散布地として認識されていたものであるが、遺構面及び包含層の存在を確認できた意義は大きく、今後の調査・研究に一資料を提供したといえるであろう。

註1 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年)

2 田辺昭三「陶邑古窯址群」(『平安学園研究論集』第10号、1966年)、以下須恵器の型式分類については同書による。

3 今尾文昭「『中世』素掘り小溝についての一解釈」(『青陵』第47号、1981年)

中井一夫「いわゆる中世素掘溝について」(『青陵』第47号、1981年)

八尾博之「中世素掘り小溝について」(『矢部遺跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊、1986年)

# 遺物観察表

遺物番号 器種 出土土層	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面
1 土師器 羽釜 包含層Ⅰ	・ _____ ・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ _____	直径0.5mm以下の石英・ 雲母を多量に含む。	良好	・ 淡黄褐色 ・ 淡黄褐色 ・ 淡灰色
2 須恵器 不明 包含層Ⅰ	・ _____ ・ 外面 平行タタキ 内面 ヨコナデ ・ _____	直径0.5mm以下の長石を 若干含む。	良好	・ 赤灰色 ・ 赤灰色 ・ 赤紫色
3 須恵器 甕 包含層Ⅰ	・ _____ ・ 外面 平行タタキ 内面 同心円文後ヨコナデ(半スリケシ) ・ _____	直径0.5mm以下の長石を 若干含む。	良好	・ 濃青灰色 ・ 淡青灰色 ・ 淡青灰色
4 須恵器 甕 包含層Ⅰ	・ _____ ・ 外面 平行タタキ 内面 同心円文後ヨコナデ ・ _____	直径1mm以下の石英を 含む。直径0.5mm以下の 長石を含む。	ややあまい	・ 淡青灰色 ・ 淡褐色 ・ 淡褐色
5 土師器 小皿 包含層Ⅱ	復元口径10.6cm。口縁部「て」字状を呈す。 ・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ 外面 指頭による押圧 内面 ヨコナデ ・ _____	直径0.5mm以下の雲母を かなり含む。	良好	・ 暗褐色 ・ 暗褐色 ・ 赤褐色
6 土師器 小皿 包含層Ⅱ	復元口径10.6cm。口縁部は上外方にのび、 端部は丸い。 ・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ _____	直径0.5mm以下の長石を わずかに含む。直径0.5 mm以下の雲母を含む。	良好	・ 暗褐色 ・ 暗褐色 ・ 暗褐色
7 青磁 椀 包含層Ⅱ	高台はわずかに外方に張り、短い。 ・ _____ ・ 外面 蓮弁文後施釉 内面 施釉 ・ 外面 高台底面および底部底面に施釉 内面 施釉	直径0.5mm以下の長石を わずかに含む。	良好	・ 緑灰色 ・ 緑灰色 ・ 白灰色
8 瓦器 播鉢 包含層Ⅱ	内面に単位10本(4本/cm)の櫛描き播目を 施す。 ・ _____ ・ 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヨコナデ後櫛描き播目 ・ _____	直径0.5mm以下の長石・ 石英・雲母を含む。	良好	・ 淡黒灰色 ・ 淡黒灰色 ・ 白灰色
9 須恵器 甕 包含層Ⅱ	・ _____ ・ 外面 平行タタキ後カキ目 内面 同心円文 ・ _____	直径0.5mm以下の雲母を かなり含む。直径0.5mm 以下の長石をわずかに含 む。	良好	・ 淡青灰色 ・ 白灰色 ・ 淡青灰色
10	・ _____	直径0.5mm以下の長石を	良好	・ 淡青灰色

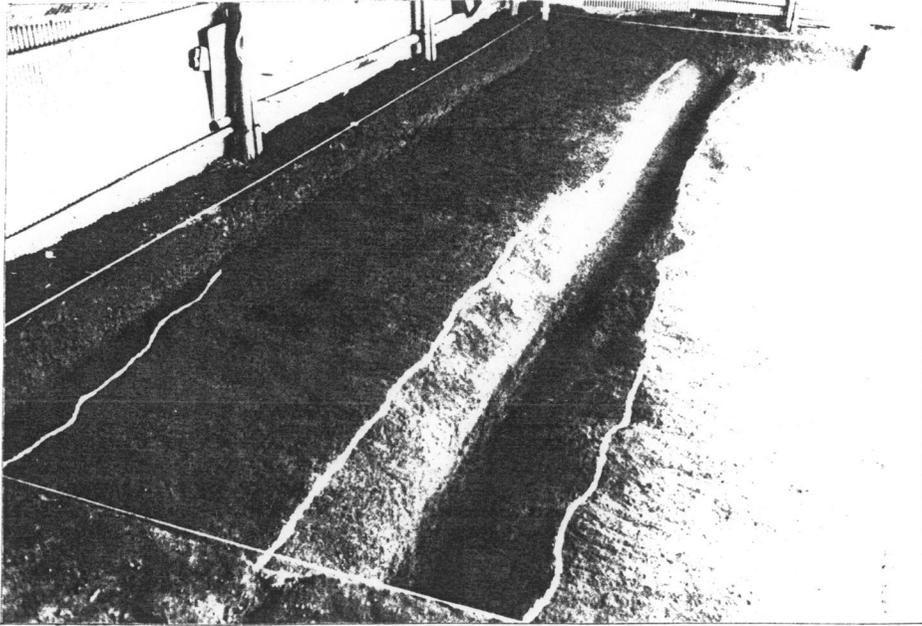
遺物番号 器種 出土土層	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面
須恵器 甕 包含層Ⅱ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ(半スリケシ) その後カキ目を施す 内面 同心円文	含む。		・淡青灰色 ・淡白灰色
11 須恵器 甕 包含層Ⅱ	・外面 平行タタキ 内面 同心円文後ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石を 含む。	良好	・濃青紫色 ・濃青紫色 ・赤紫色
12 土師器 小皿 包含層Ⅲ	復元口径9.4cm。口縁部「て」字状を呈す。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径2mm以下の石英・長 石を含む。直径1mm以下 の雲母をかなり含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
13 土師器 小皿 包含層Ⅲ	復元口径10.6cm。口縁部「て」字状を呈す。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の雲母を かなり含む。直径0.5mm 以下の長石をわずかに 含む。	良好	・暗褐色 ・淡褐色 ・淡褐色
14 土師器 小皿 包含層Ⅲ	復元口径12.1cm。口縁部「て」字状を呈す。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・ 雲母をかなり含む。	良好	・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡灰褐色
15 土師器 杯 包含層Ⅲ	復元口径14.4cm。口縁端部をわずかに外反 させて、丸くおさめる。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 指頭による押圧 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・ 雲母をかなり含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・淡赤褐色
16 須恵器 杯身 包含層Ⅲ	復元口径15.0cm。口縁部は上外方にのび、 端部は丸い。高台はあまり高くなく、わずか に外方にふんばる。脚端面は水平面を成す。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・ 雲母をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・赤紫色
17 瓦器 椀 包含層Ⅲ	口縁部は上外方にのび、端部は丸く内傾し て段を成す。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキを密に施す。 内面 ヨコ方向のヘラミガキを密に施す。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキを密に施す。 内面 ヨコ方向のヘラミガキを密に施す。	直径0.5mm以下の長石・ 雲母をわずかに含む。	良好	・暗灰色 ・淡青灰色 ・白灰色
18 円筒埴輪 包含層Ⅲ	タガは、断面が丸みを帯びた台形を呈し、 突出度はやや低い。	直径1mm以下の石英を多 量に含む。直径0.5mm以 下の雲母をかなり含む。	良好	・暗赤褐色 ・暗褐色 ・暗赤褐色

遺物番号 器種 出土土層	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部	胎土	焼成	色調・内面 ・断面
	・外面 ヨコハケ ・内面 ナデ			
19 円筒埴輪 包含層Ⅲ	タガは、側面が内湾しているが、縁は丸みを帯び、突出度はやや低い。 ・外面 ヨコハケ ・内面 ナナメ方向のハケおよび指頭による押圧	直径2mm以下の石英をわずかに含む。直径0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
20 須恵器 甕 もしくは 壺 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後カキ目調整 ・内面 ナデ	直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・濃青灰色 ・赤紫色
21 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ） ・内面 同心円文後ヨコナデ（スリケシ）	直径0.5mm以下の長石を含む。	良好	・淡青灰色 ・青灰色 ・暗青灰色
22 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ） ・内面 同心円文後ヨコナデ（半スリケシ）	直径1mm以下の長石をわずかに含む。	良好	・暗青灰色 ・暗青灰色 ・赤紫色
23 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ） ・内面 同心円文	直径0.5mm以下の長石を含む。	良好	・白灰色 ・濃青灰色 ・暗青灰色
24 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ ・内面 同心円文	直径0.5mm以下の長石を含む。	良好	・青灰色 ・暗灰色 ・暗灰色
25 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後やや粗いタタキを施し、その後ヨコナデ（スリケシ）を施す。 ・内面 同心円文後ヨコナデ（半スリケシ）	直径0.5mm以下の雲母をかなり含む。直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	良好	・淡青灰色 ・青灰色 ・白灰色
26 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ ・内面 同心円文後ヨコナデ	直径0.5mm以下の雲母・長石をわずかに含む。	良好	・淡青灰色 ・青灰色 ・青灰色
27 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキを格子状に重ねた後、ヨコナデ（スリケシ）を施す。 ・内面 同心円文	直径0.5mm以下の長石をかなり含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
28 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ）を施し、その後カキ目を施す。 ・内面 同心円文後ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・雲母をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色

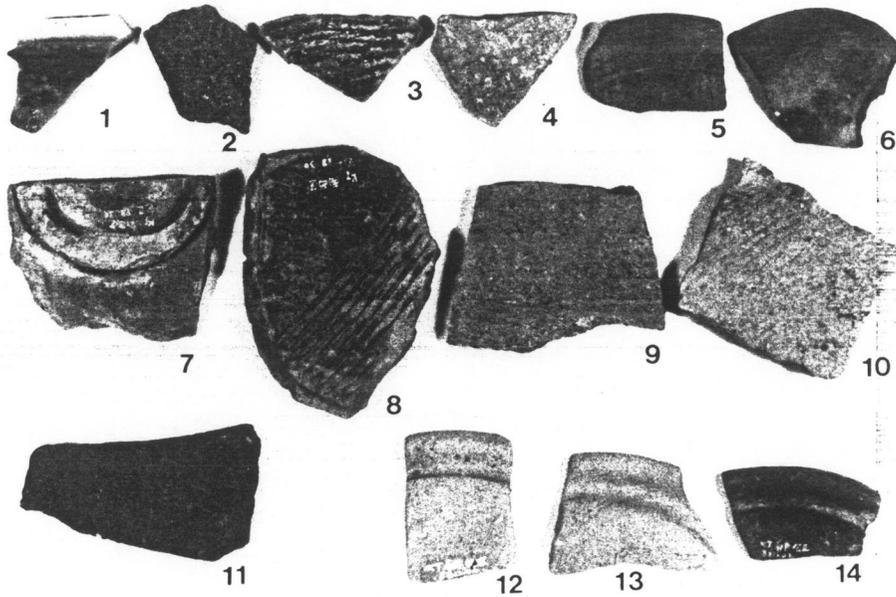
遺物番号 器種 出土土層	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部	胎土	焼成	・外面 ・内面 ・断面 色調
	・ ――			
29 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・ ―― ・外面 平行タタキ後カキ目調整 内面 同心円文 ・ ――	直径0.5mm以下の長石・ 石英をわずかに含む。	良好	・淡白灰色 ・淡青灰色 ・濃青灰色
30 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・ ―― ・外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ） 内面 同心円文後ヨコナデ（スリケシ） ・ ――	直径0.5mm以下の長石を わずかに含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
31 須恵器 甕 包含層Ⅲ	・ ―― ・外面 平行タタキ後カキ目調整 内面 同心円文 ・ ――	直径0.5mm以下の長石を わずかに含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
32 須恵器 杯身 包含層Ⅳ	復元口径12.6cm。たちあがりは内傾しての び、端部は丸い。受け部はやや上外方にのび 端部はやや鋭い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ ―― ・ ――	直径0.5mm以下の石英・ 長石・雲母を含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
33 須恵器 杯身 包含層Ⅳ	復元受け部径14.2cm。受け部は上外方にの び、端部は丸い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ ―― ・ ――	直径0.5mm以下の長石・ 雲母をかなり含む。	良好	・淡青灰色 ・青灰色 ・青灰色
34 土師器 杯 包含層Ⅳ	復元口径14cm。口縁部は上外方にのび、端 部はやや外反し丸い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 指頭による押圧の後、不定方向のナ デを施す。 内面 ハケ（10本/cm）調整後、ヨコナデ ・ ――	直径0.5mm以下の長石・ 雲母を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・淡赤褐色
35 須恵器 甕 包含層Ⅳ	・ ―― ・外面 平行タタキ後、粗いヨコナデ 内面 同心円文 ・ ――	直径0.5mm以下の雲母・ 長石を含む。直径1mm 以下の石英をわずかに 含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
36 須恵器 甕 包含層Ⅳ	・ ―― ・外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ） 内面 同心円文後ヨコナデ（スリケシ） ・ ――	直径0.5mm以下の長石を かなり含む。直径1mm 以下の石英をかなり含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・濃青灰色
37 須恵器 杯蓋 包含層Ⅴ	復元口径14.4cm。口縁部はわずかに下外方 にのび、端部は丸みを帯びて内傾した後、不 明瞭な段を成す。天井部と口縁部の境界は浅 い凹線となっている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・ 長石・雲母を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色

遺物番号 器種 出土土層	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面
	・ ・			
38 須恵器 杯蓋 包含層V	14.8 復元口径18.0cm。口縁部はわずかに下外方にのび、端部は丸みを帯びて内傾した後、不明瞭な段を為す。天井部と口縁部の境界は突出度の低い稜線となっている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ ・	直径0.5mm以下の石英・長石をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・淡赤紫色
39 須恵器 杯蓋 包含層V	1.3 復元口径18.0cm。口縁部はほぼ垂直に下方にのび、端部は丸い。天井部と口縁部の境界は浅い凹線となっている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ ・	直径0.5mm以下の長石をわずかに含む。	良好	・濃青灰色 ・青灰色 ・青灰色
40 須恵器 杯身 包含層V	復元口径14.2cm。たちあがりはやや内傾して上方にのび、端部は丸い。受け部は上外方にのび、端部は丸い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ ・	直径0.5mm以下の長石をかなり含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色
41 須恵器 杯身 包含層V	復元口径14cm。たちあがりは内傾してのびる。受け部は、上外方にのび、端部は丸い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラゲズリ（ロクロ回転方向 右廻り） 内面 ヨコナデ ・	直径0.5mm以下の長石・石英・雲母をかなり含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
42 須恵器 高杯 包含層V	脚部は外反して下り、端部近くで下方に屈曲する。三方向に長方形スカシを有する。 ・ ・ ・外面 カキ目調整 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・石英をかなり含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・赤紫色
43 須恵器 短頸壺 包含層V	復元口径9.8cm。復元体部最大径12.5cm。口頸部はわずかに内湾しながら上方にのびる。口縁端部は丸い。体部は頸部との境界から下外方にのびた後、下方に屈曲する。 ・外面 カキ目調整 内面 ヨコナデ ・外面 カキ目調整 内面 ヨコナデ ・	直径0.5mm以下の石英をわずかに含む。	良好	・暗青灰色 ・暗青灰色 ・青灰色
44 須恵器 杯蓋 包含層V	・ ・外面 ヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り） 内面 同心円文後弱いナデ ・	直径0.5mm以下の石英・長石・雲母をわずかに含む。	良好	・青灰色 ・青灰色 ・青灰色

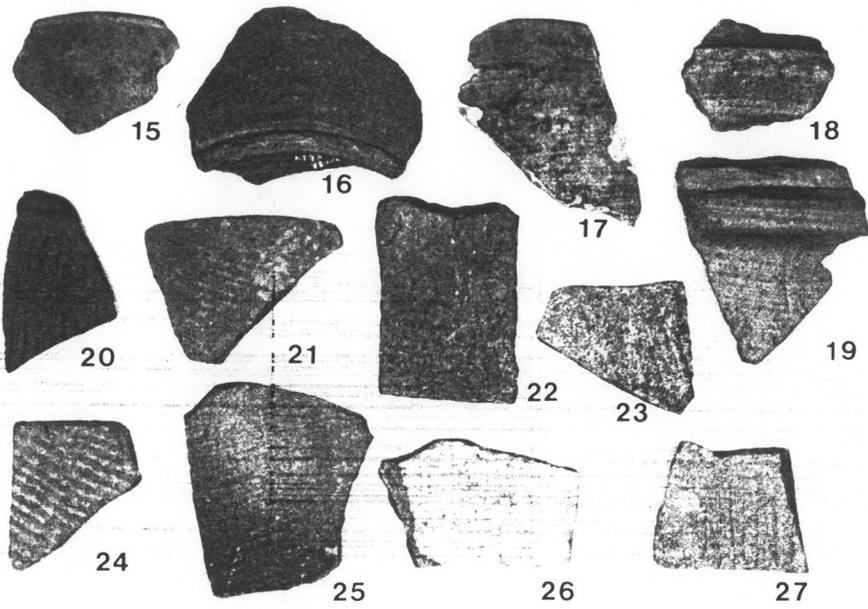
遺物番号 器種 出土土層	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面
45 須恵器 甕 包含層V	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ _____</li> <li>・ 外面 平行タタキ後カキ目調整</li> <li>・ 内面 同心円文</li> <li>・ _____</li> </ul>	直径0.5mm以下の石英・長石をわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 淡青灰色</li> <li>・ 淡青灰色</li> <li>・ 淡青灰色</li> </ul>
46 須恵器 甕 包含層V	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ _____</li> <li>・ 外面 平行タタキ後ヨコナデ（スリケシ）</li> <li>・ 内面 同心円文後ヨコナデ（スリケシ）</li> <li>・ _____</li> </ul>	直径0.5mm以下の長石をかなり含む。直径1mm以下の石英を含む。	ややあまい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 白灰色</li> <li>・ 淡褐色</li> <li>・ 淡褐色</li> </ul>
47 須恵器 甕 包含層V	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外面 ヨコナデ後櫛描き波状文（単位20本）を施す</li> <li>・ 内面 ヨコナデ</li> <li>・ _____</li> <li>・ _____</li> </ul>	直径0.5mm以下の長石・石英・雲母をかなり含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 暗青灰色</li> <li>・ 青灰色</li> <li>・ 青灰色</li> </ul>
48 土師器 杯 包含層V	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 復元口径12.4cm。口縁部はわずかに外反しながら上方にのび、端部近くで外方に屈曲する。口縁端部は丸い。</li> <li>・ 外面 ヨコナデ</li> <li>・ 内面 ヨコナデ</li> <li>・ 外面 ヨコナデ</li> <li>・ 内面 ヨコナデ</li> <li>・ _____</li> </ul>	直径0.5mm以下の長石・雲母をかなり含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 淡赤褐色</li> <li>・ 赤褐色</li> <li>・ 淡赤褐色</li> </ul>



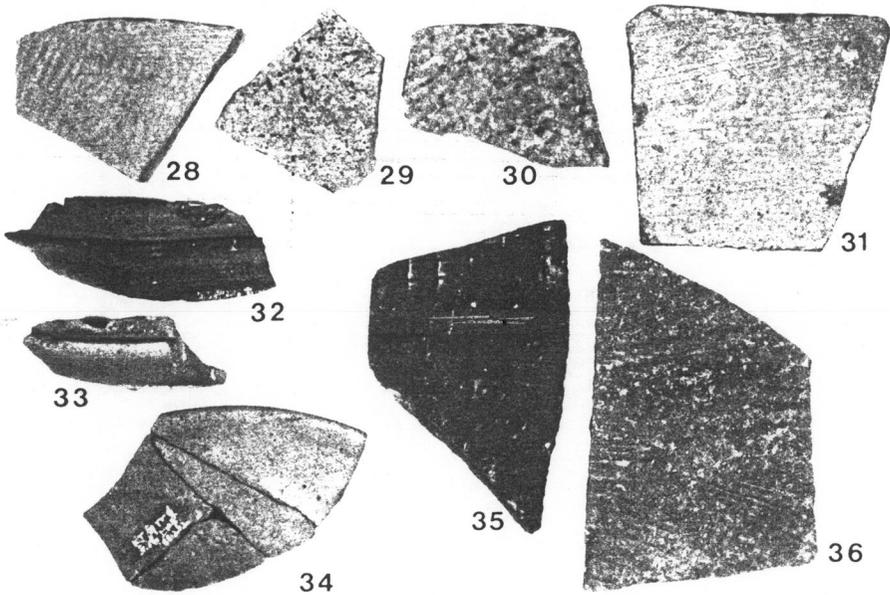
遺構検出状況(調査区西端、南から)



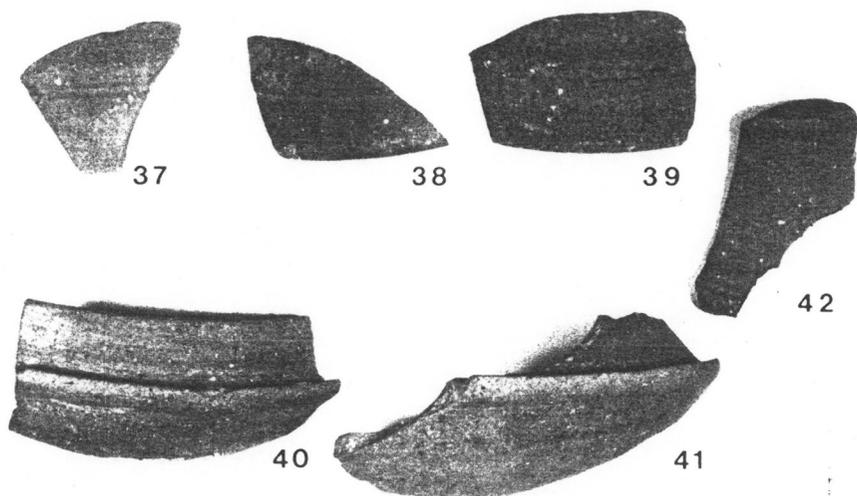
出土遺物(包含層Ⅰ、1~4・同Ⅱ、5~11  
・同Ⅲ、12~14)



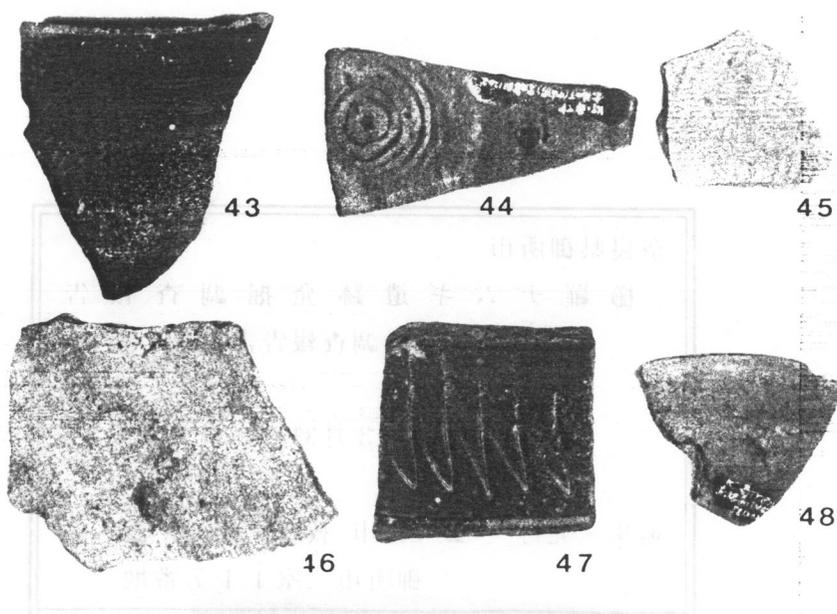
出土遺物（包含層Ⅲ）



出土遺物（包含層Ⅲ、21~31・同Ⅳ、32~36）



出土遺物（包含層V）



出土遺物（包含層V）

奈良県御所市

櫛羅ナムギ遺跡発掘調査報告

御所市文化財調査報告書 第7集

平成元年3月31日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市三室117番地

奈良女子大学蔵書

SS000269 1000